

～ 21世紀の知的協力委員会 ～

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授
 順天堂大学国際教養学部 教授
 一般社団法人 がん哲学外来 理事長
 「明日を考える会 ～次世代の社会貢献～」
 会長 樋野興夫



ドキュメンタリー映画『がんと生きる 言葉の処方箋』が、今年、5月3日～5月9日『新宿武蔵野館』公開されることになった。

思えば、2008年、順天堂医院で、「がん哲学外来」が始まった。毎日新聞、読売新聞、NHKにも大きく報道された。10年以上前であろうか、朝日新聞の一面の記事に、私のことを、『「変わり者」でなく「変わり種」と、紹介されたことが鮮明に甦った。「変わり種」は「からし種」の如くとのことである。今年の3月7日の誕生日に、『種を蒔く人になりなさい』（いのちのことば社）が、発行されることになった。人生不思議な出会いである。

新渡戸稲造（1862～1933）は、国際連盟事務次長時代に、「知的協力委員会」（後のユネスコ）を構成し、知的対話を行った。そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表するアインシュタイン、キュリー夫人もいたことは特記すべきことである。

今こそ 真の国際人として、「21世紀の知的協力委員会 ～ 明日を考える会 ～ 次世代の社会貢献 ～」の世界発信の時代到来ではなからうか。

大切な人ががんになったとき... 生きる力を引き出す 寄り添い方



「寄り添う」ということについて

編集者

今から30年近く前のことです。佐藤さんは40代の半ばで胃がんが見つかりました。発見が遅れたことに加えて進行が早かったこともあり、ご家族へはあと3か月と告げられていました。

日ごとに痩せ衰え、体力も落ちて病院のベッドから起き上がることも難しくなり、出来ることといえば採血や血圧を取りに来るナースに腕を差し出すことくらいでした。

さて、その朝の担当は配属されて半年の新人ナース。まだおぼつかない手つきで採血の針を刺そうと何度も試みまたものの、なかなかうまくいきません。

泣きそうな顔で「ごめんなさい。うまく刺せないんです。先輩を呼んできますから・・・」と言って行きかけた彼女の腕を捕まえて、佐藤さんがこう言いました。

「やめるな。あんたなら出来るから。あんたから血をとってもらいたいんだ。おれはちっとも痛くないんだ。おれを使って練習しろ。」

彼女は何度も何度も失敗しながら、十何回かかきやっと採血をやり終えることが出来ました。

「ほら、出来たじゃないか。良かったなあ。いま止めてたら血を取るたびに怖くなるんだ。でも出来たじゃないか。あんたなら出来るって、おれには分かってたんだ。」

彼女は佐藤さんと手を取り合い、二人で涙を流しながら喜び合ったそうです。

樋野先生の言葉の処方箋に「支えることは出来なくても、寄り添うことなら子供にも出来る」という言葉があります。

がんの末期でベッドから起き上がることも困難な佐藤さんでしたが、新人のナースに寄り添い、彼女の成長を後押ししました。そして、この佐藤さんのほんの数分間の関わりが今に至るまで多くの人の心に残り、語り継がれ、これからも「寄り添う」ということへの力強さが私たちを通して、きっと受け継がれて行くのです。

明日を
考える
ヒント

「大きなことをする必要はありません。小さなことに、大きな愛を込めればいいのです。」

「人を思いやるゆとりを失うほどに、自分を忙しくしてはいけません。」

（マザー・テレサ）